

美学の領野に関連してフロイトが示した極端な留保のことを、ラカンは強調しています¹。実際のところ、フロイトにとり美とはあまり有用なものではなく、美は「苦痛という脅威から身を守ることについてはあまり多くを与えない [中略]」²。しかしながら、「美について精神分析は言うべきことが何もない」という彼の主張は、次の指示の後についてくるものです。『美』と『魅力』は性的対象の諸性質の源泉に存在している」が、その同じもの (=性的対象) の迂回を表している、と。性的興奮を呼び起こす性器は「ほとんど美しいと判断されることはない」。したがって性的魅力はこれらの諸器官が副次的な性的性質の方へと迂回されているものです。つまりフロイトによる美とは、欲動の現実的な対象の包装にほかならないのです。

ラカンの読者には知られているラカンの定式—恐怖 (おぞましいもの *horreur*) の前にある、究極の障壁としての美の機能³—は、フロイトの定式からそれほど隔たってはいません。しかしながら、ラカンの教育活動におけるさまざまな練り上げにそって、多様な形で読まれうるものです。

平和をもたらす鏡

美しい光景のような、ある完全な絵画のもつ「平和をもたらす効果⁴」は、去勢がそこには存在しないことにおいて、見る領野の主要な特徴に応答しています。ここでの美とは、陶酔させ麻痺させる形で、姿を現しています。この絵は自我のひとつの反響でしかなく、その自我は自らにとって透明なものであると想像されています。それは鏡像段階のイメージの諸条件に対応するものです。その対象は不在であり、誤認され、絵から締め出されています。にもかかわらず、その対象は存在していないわけではありません。もし不運にも風景に馴染まないある要素が—そこにあるべきではないある物が—絵において浮いてくる (染みをつくる) とすれば、目覚めが最も乱暴な形 (悪夢から目覚めるような形) でやってきます。陶酔状態からのこのような脱出は、かなり多くの場合において、不安と関連づけられているものです。

真理の輝き

フロイトのテキスト「アクロポリスでの記憶障害」の読解のなかで、ジャック＝アラン・ミレールは、アクロポリスの美を前にしたフロイトのなかに生じる享楽こそが、奇妙な感覚を伴うひとつの主体の分割を引き起こしていることに注目しています。それこそ「あまりに美しすぎて本当=真ではない (あまりに美しくて本当のこととは思えない)」⁵と彼がみているものです。ところで、ラカンは「真なるものは、あまり見るに美しくはないからこそ、美は真なるものの輝きではないとしても、少なくとも真なるものの覆いなのです⁶」と説明しています。真理への愛について知られるフロイトは、美のなかに出現する真のこの輝きによって魅了されたのだと私たちは理解することができます。

しかしながらこの美しい絵画は、ある横断から放たれる罪悪感の重しをともなった、回帰する父のまなざしにより、穴を穿たれます。アクロポリスを訪問することは、フロイトにとって父を越えた彼方への一歩だったのですから。父の方とは言えば、こんな経験をすることができなかったのです。それ以降、アクロポリスのこの光景

¹ Cf. Lacan J., *Le Séminaire, livre VII, L'Éthique de la psychanalyse*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 1986, p. 256.

² Freud S., *Le Malaise dans la civilisation*, Paris, Points, 2010, p. 74.

³ Cf. Lacan J., « Kant avec Sade », *Écrits*, Paris, Seuil, 1966, p. 776.

⁴ Lacan J., *Le Séminaire, livre XI, Les Quatre Concepts fondamentaux de la psychanalyse*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 1973, p. 93.

⁵ Miller J.-A., « L'image reine », *La Cause du désir*, no94, novembre 2016, p. 24

⁶ . Lacan J., *Le Séminaire, livre VII, L'Éthique de la psychanalyse*, op. cit., p. 256.

はフロイトの心のなかに禁じられた享樂を引き起こします。そのため彼は揺れ動き、ある「離人症⁷」と比較できる状態に陥ってしまうのです。

欲望のまばゆさ

真なるものがあまり見るに美しいものではないのだとすれば、その過激なバージョンにおける欲望は、ひとつの「絶対的な破壊を打ち立てます・・腐敗の向こう側⁸」。この絶対的破壊の領野でこそ、善につづいて美は、究極の障壁でありうるのです。アンチゴネのまばゆさはこの障壁の横断を決意した彼女の勇気に宿っています。またそのまばゆさは、クレオンによる禁止にもかかわらず兄のポリュネイセスに墓を作りたいという彼女の欲望を「怖れと憐れみ⁹」もなく実現しようという勇気に宿っています。揺るぎない意志のように現れるこの欲望が、死の領域に踏み込んだ生と、生の領域に踏み込んだ死とを打ち立てるのです¹⁰。『コロノスのエディプス』のなかの彼女の父にならって、この欲望はアンチゴネを美の究極の障壁を乗り越えるよう導きます。それはあの恐怖（おぞましいもの *horreur*）の領域に達するためであり、その領域とは、墓において生きながらえつつ彼女は自身が既に死んでいるのを見ることが可能である場なのです。この「美の機能」はひとつのイメージのまわりで連結されているのではないことに、ここで留意しましょう。ここで問題となるのは、シニフィアンの絶対的なある次元にむけられた、アンチゴネの流儀です。そのシニフィアンは妥協のないひとつの法に対応し、悲劇のヒロインはクレオンの法に対立しています。クレオンが王の性質をもち、許可されていることと禁じられていることとを定式化する一方で、アンチゴネはクレオンにシニフィアンの過激な法を対置させます。兄は兄であるという名目において¹¹、あるものはあると言表するひとつの掟の名のもとに、彼女はクレオンの法に背くのです。

凌辱（outrage）

以上のように、美とは、善とは異なり、ひとつのルアーではありません¹²。美が仮に最悪のものとの関連でひとつの障壁であるとしても、欲望が一線を越えるとき、欲望と結ばれる破壊的次元を、美は隠しはしません。それこそまさにラカンが「凌辱¹³」と呼ぶもので、その表れは死の欲動、苦しみ、マゾシズムの次元のものです。この曖昧な関連と美の機能のふたつの面—欲望に片足を突っ込み、もう片方の足は最も過激な破壊の諸傾向に突っ込んでい—は、臨床的なあらわれも伴っていて、そのことをラカンは指示することを忘れませんでした。ある分析のセッションで、ひとりの患者が「主体の星回り（布置）の基本用語のひとつの場所に、攻撃的と呼ばれる考え」を喚起するとき、それには美的な次元のディスクールが伴っていることでしょう。「聖書の引用、作家への参照、古典的なものであってもなくても音楽の喚起¹⁴」のことです。この現象はいつでも生じるのであり、それは「ガイガーカウンターのもつ確かさで（生じる）」とラカンは言っています。臨床のこのような確認は、恐怖（おぞましいもの）の境界上に位置づけられるものとしての美の機能を、確証するものです。

醜さとアガルマ

ラカンは言います。「分析とは、魅力が不都合なものである唯一の実践です¹⁵」と。つまりもし「分析的な独房がまさに（中略）愛の床そのものであるなら」、「身体の惹きつける力¹⁶」、つまりフロイトが美と魅力に帰属させる

⁷ . Freud S., « Un trouble de mémoire sur l'Acropole. Lettre à Romain Rolland. », Résultats, idées, problèmes, t. II, Paris, PUF, 1985, p. 227

⁸ Lacan J., Le Séminaire, livre VII, L'Éthique de la psychanalyse, op. cit., p. 256.

⁹ Ibid., p. 300.

¹⁰ Cf. ibid., p. 291

¹¹ Cf. ibid., p. 324

¹² Cf. ibid., p. 280

¹³ Ibid., p. 279

¹⁴ Ibid., p. 280

¹⁵ Lacan J., Le Séminaire, livre VIII, Le Transfert, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 2001, p. 23.

¹⁶ Ibid., p. 24 & 22.

性的性質は、治療がそうであるもの、つまり治療としてとどまるために、分析状況の外部にとどまるとみなされています。フロイトはある症例の逸話を語っています。その実践の最初の頃、女性のヒステリー患者が催眠状態から脱する時に、フロイトの首のまわりに両腕をかけてきました。「平静を保ち、この偶然を抗しがたい個人的な魅力の責任だと思わないようにした¹⁷」と書いています。もし転移性の愛が分析が行われるために絶対不可欠な条件であるとしても、醜さはこの転移性の愛にとっていかなる障害にもなりません。それはソクラテスのケース¹⁸が示しているとおります。この醜さはひとつのマスクであり、このマスクは内面の美、つまりアガルマによって輝いていて、転移はこのアガルマに依拠するものなのです¹⁹。さらにフロイトはその冷静さのおかげで、愛の転移の新たな使用法を精神分析のなかに確立できたのです。もし初期において、この転移が彼にとって悪い驚きとして提示されたとしても、彼はそれを用いることができ、そこからひとつの知を抽出することができました。それこそラカンが知の想定的主体という表現において認めているものです。

現代的な特異性（かけがえのなさ）

臨床が私たちに示すのは、美の問いは、機会があれば、＜他者＞との関連において、欲望と愛との関連において、主要な関心事となることです。今度のユフォルカ大会では、美の特異的な諸問題—分析家に6人の現代的主体が赴くことになった美の諸問題—を扱うことになります。例えば、屑という自身の存在への視線を覆う一枚のベールとして作用する、そういう美は、ある主体にとっては困惑の源となり得ます。あるいはまた、主体の美に投げかけられる父のまなざしがあまりにつねにそこにあるため、美はある種、制止の効果の原因となります。さらには、もし美が最悪のものに直面する障壁として機能するなら、それを前にして美がひとつのリミットを描くところの恐怖は、主体ごとに、特異的なものとなります。父または母の狂気、「置き去りにする²⁰」身体の諸出現、主体の側からの攻撃的な欲動の現われ、どこまでもついてまわる＜他者＞のまなざしにより引き起こされる性愛化、などです。

それでは皆さん、2025年6月21日パリのミュテュアリテ会館でお会いしましょう。

¹⁷ . Freud S., Sigmund Freud présenté par lui-même, Paris, Gallimard, 1984, p. 47.

¹⁸ Cf. Lacan J., Le Séminaire, livre VIII, Le Transfert, op. cit., p. 23.

¹⁹ Cf. Miller J.-A., « L'image reine », op. cit., p. 23.

²⁰ Lacan J., Le Séminaire, livre XXIII, Le Sinthome, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 2005, p. 66.